

水平線の向こう側には

海の先にはまっすぐに伸びた地平線が見えます。どこかへと続くが、どこに辿り着くかはわからないその先に僕たちは思いを馳せます。視線の先に見える世界は常に不安定で、普段見えていない/見ようとしていない建築が突然目に見えた時、僕たちはその風景にある種の関心を抱きます。また、目に見えているものの本来の意味を理解した時、その風景はあなたの中で別の意味合いを持つかもしれません。建築は、ふとした時に他者に特別な感情を抱かせ、形のない物事を想起させるようなシステムを持つ可能性があります。本設計ではこれらの目に「見える/見えない」の軸と目には見えているが建築の意図を「理解している/していない」の軸の両軸を用いつつ、四則演算的な設計を試みることで、この沿岸に接する者たちが死者に思いを馳せるように仕向けます。また、本設計の題材として海上の散骨堂を構想し、敷地を相模湾江ノ島沖とします。

01 敷地から

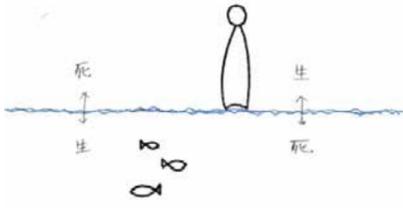


核家族化や少子高齢化を抱える現代の日本で、墓に骨を埋めるという選択肢が当たり前のものではなくつつあります。それに伴い日本で行われてきた宗教的儀式は、その行為の目的の輪郭が希薄になり、それを象徴させる墓場という建築の形態そのものの変更が余儀なくされています。近年、海洋散骨がこれらの状況の結果として増加していると考えられます。

以上を踏まえて、人が感じる死者の面影を建築的に、具体的な個々の墓場を作らずに保存する方法を考えます。敷地は江ノ島沖から散骨場が水平線からわずかに見える場所に設置し、鶴岡八幡宮から相模湾にのびる参道の延長線、江の島と大島をつなぐ線の交わりに位置に置かれることで、この沿岸に接する人々がその存在を認識できるような配置をします。

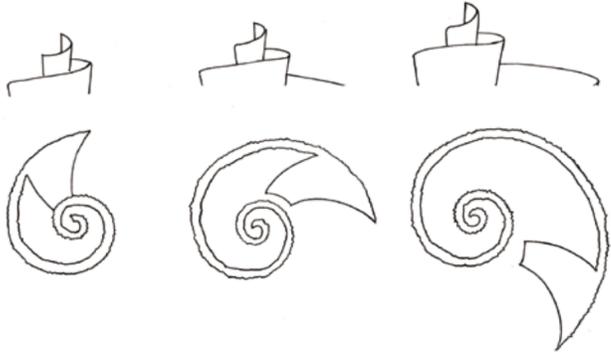
02 内側から

半透明の壁が内向きに巻かれます。半透明であることにより、内部と外部、水平線と海との境界をぼやかし、壁としての役割を用いつつその空間を柔らかく分節することで生死の境界を曖昧にします。



分節された空間の中心に散骨場は設置され、散骨が内部で行われます。建築全体が墓の入り口であり、内部にその行為を巻いていくことで本来の墓的役割であるシェルターとしての機能をもたせると同時に、散骨によって水平線に広がる海全体を墓そのものとみなし、建築から派生する新しい生死の捉え方を実感します。散骨を行う遺族は、これらの意味合いを内側から実感として認識し、この散骨場にこの先来ることがなくとも、沿岸からわずかに見えること

で、亡くなった者たちをどこか遠くに、でもその存在をわずかに認めさせ思いを馳せることができます。

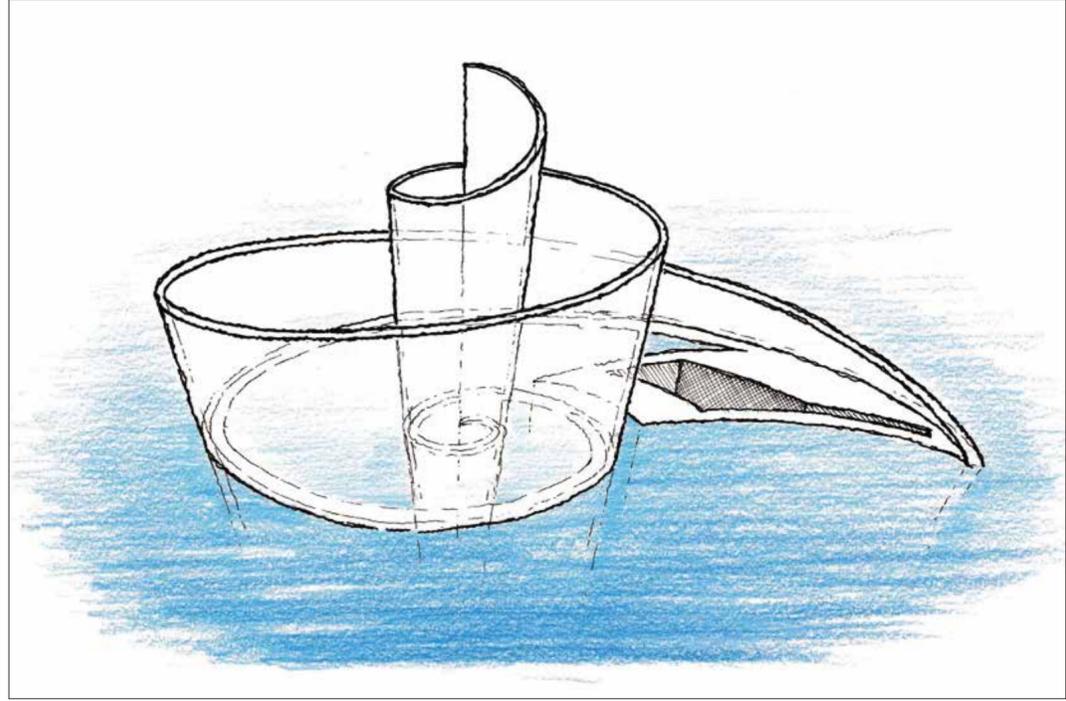
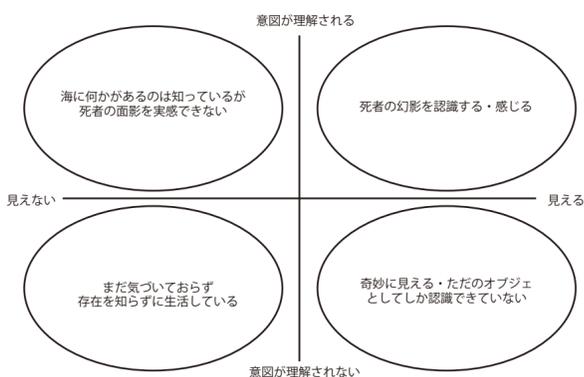


また、貝殻は海水中のナトリウム分と貝の呼吸

によって生じる二酸化炭素が反応して生まれる炭酸カルシウムによって生じ、炭酸カルシウムは表層海中では永久に溶解しません。内側からの建築的なアプローチとして、この散骨堂から集めた海洋プラスチックを火葬場で生じた二酸化炭素と海水中のナトリウムから生成した炭酸カルシウムでコーティングし、このコーティングされたプラスチックを壁材として、巻貝のように継ぎ足していきます。

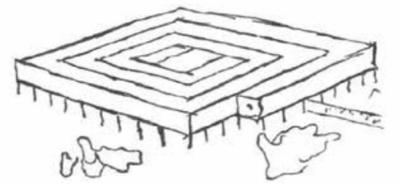
03 外側から

外側にいるものたちにとって、この巻きは一つのオブジェクトとして機能します。内部で何が行われているかを、十分に知ろうとしなければ理解できないこのオブジェクトに人はある種の関心を抱き、何かが海にあるという事実が、その風景に接する人々の記憶に残ります。また、この散骨場が相模湾沿岸の種々の場所からわずかに見えることでその存在がかすかに認識され(=視点の引き)、その日ごとの天気や場所によって見え方が変わり(=視点の分割)、少しずつ散骨堂自体が大きくなることで(=建築の増築)、長い時間の中で散骨堂と海が持ちうる固有の風景が変化し人々の日々見慣れた景色がどこか懐かしい記憶の中に積層されることで(=風景の積層)、この散骨場が故人を思い起こさせる装置となります。

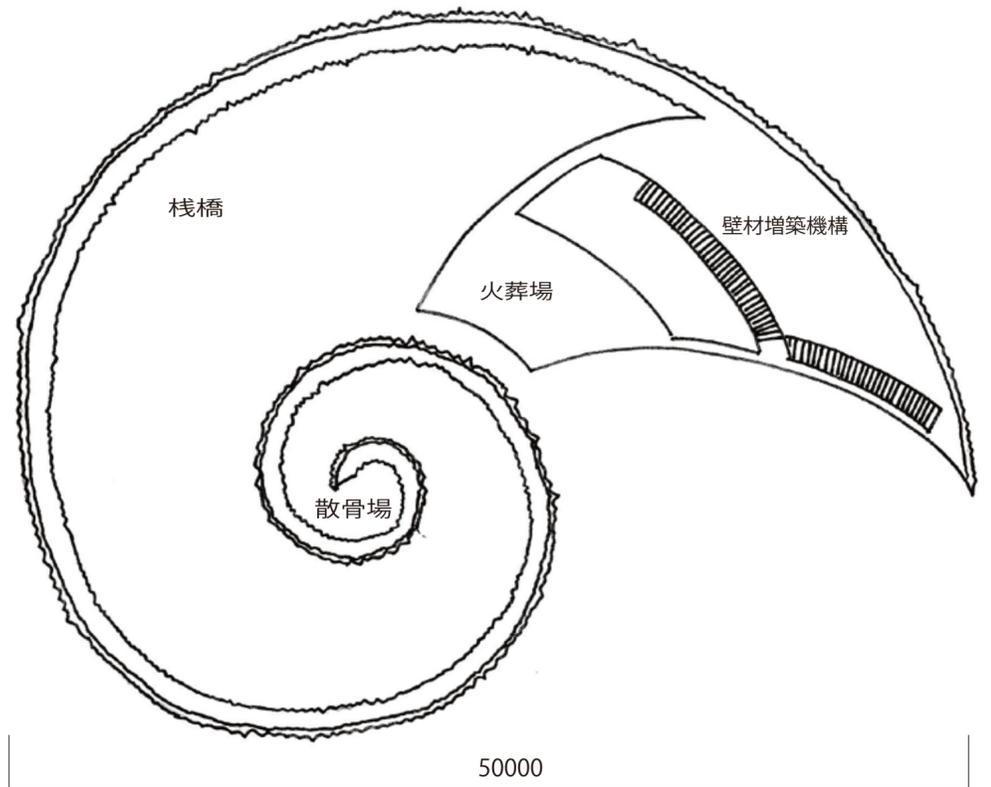


引用

ル・コルビジエはかつて、「無限成長美術館」を構想したが、これはコルビジエが近代の美術館がその全体性(=作品の包括的な歴史やその流れを含めたもの)を考慮してないことを批判したことにより構想されたものです。



本設計では、この「全体像の消失」という構造が現代の日本の死者に対する、墓場における「遺族間全体で共有されていた意識の消失」の文脈と類似していることを当作品との間に見出し、この造形を引用しました。



■平面図 S=1:250

